

モニタリング手法の選択と設計：ニホンザル編

株式会社 野生動物保護管理事務所
清野 紘典

講演要旨

ニホンザルは、社会的なまとまりの強い群れを形成し、独自の行動圏を形成することから、群れを管理の最小単位とした群れ管理が保護管理の基本理念となる。また、群れ管理を基軸とした広域的な個体群の管理は、特性の異なる群れの分布状況や被害状況、生息環境など適切な現状把握に基づき、地域的な特徴に応じて実践することが有効と考えられている。

ニホンザルのモニタリングは、昼間に目視しやすく集団で出現するという生態的な特徴を生かした手法が確立しており、特定計画の策定や改訂、施策の意思決定、対策強化の推進に向け、環境省のガイドラインで導入の考え方について整理が進んでいる。いずれのモニタリング手法も社会実装され、普及の段階にある。

本講義では、ニホンザルと地域の軋轢を軽減し、適切に個体群の保全に導くためのモニタリングについて、導入すべき手法の役割や内容について事業化を念頭におき具体的な実践事例を交えて紹介する。

調査スケール	モニタリング	目的	生息状況					被害状況				対策実施状況	
			群れ数	分布推定	分布詳細	推定生息数	実測生息数	加害レベル	人身被害	生活被害	農林業被害		定性的動向
広域	出没カレンダー	現況把握 特定計画策定・改訂	○	◎		○		◎	○	○	○	△	△
	市町村ヒアリング (市町村アンケート)	広域施策の意思決定 対策の効果測定	△	△					○	○	○	○	◎
狭域	テレメトリー	対策強化群の管理 捕獲実施計画の立案 被害防除対策活用			○								
	GPS首輪				◎								
	カウント						◎						
	集落アンケート	現況把握 施策の意思決定 対策の効果測定							◎	◎	◎	◎	◎

調査スケール 広域：個体群単位、都府県～市町村 狭域：群れ単位、市町村～集落
把握状況 ◎：詳細に把握可能、○：把握可能、△：把握できるが不十分